

## 看護学生のインフォームド・コンセントの認識 ～全実習修了後の調査から～

後藤真由子、宇田優子  
新潟医療福祉大学 看護学科

【背景・目的】療養中の患者と家族は危機的な状況にあり、心理的葛藤が存在している中で、患者や家族が病気や今後の治療方針について主体的に考えていく必要がある。インフォームド・コンセント（以下 IC）の一連のプロセスには医療者からの情報提供、患者の理解・判断・自己決定という要素を含む<sup>1)</sup>。患者が自己決定し、主体的に療養生活を送るためには、医療者からの情報提供は必要であり、患者の重要な権利の一つである。この研究は、看護学科4年生がこれまでの講義や実習での IC に関する体験から IC の必要性や看護の重要性について看護学生がどのように認識しているのか明確にすることを目的とした。

【方法】看護学科4年生83名を対象に、無記名による集合自記式質問用紙を用いた調査を、2018年6月～7月に行った。アンケートへの回答、提出を以って研究に同意したとみなすことを書面で説明し、回収ボックスを配置した。調査内容は属性2項目、ICの必要性の認識5項目、看護の重要性11項目、実習でのIC同席に関する4項目で構成した。ICの必要性、看護の重要性の質問は文献を参考に作成した<sup>1), 2)</sup>。分析は記述統計、t検定を行った。集計ソフトはSPSS22.0を使用した。

【結果】回答者数は83名中79名（回収率95.2%）であった。男性14名（17.7%）女性65名（82.3%）、私的場面でのIC同席「あり」10名（12.7%）、「なし」69名（87.7%）であった。「ICの必要性の認識」と「ICにおける看護の重要性」の結果は図1、2のとおりである。3年次、4年次の実習でICに同席した学生は50名（63.3%）で、同席平均回数は1人当たり0.92回であった。学生がICに同席することができた実習は「成人急性期実習（3年次）」と「統合実習（4年次）」の28件と最も多かった。「ICの必要性」について、5項目において「必要」4点、「必要ではない」1点として4段階で回答してもらい、合計点を算出し、分析したところ男性より女性（ $p<0.01$ ）、私的場面でのIC同席経験ありの学生に有意に高かった（ $p<0.05$ ）。

「ICにおける看護の重要性」も「ICの必要性」と同様に分析した結果、男性より女性が有意に重要と認識していた（ $p<0.01$ ）。IC同席の有無による「ICの必要性」「ICにおける看護の重要性」について有意差は認められなかった。

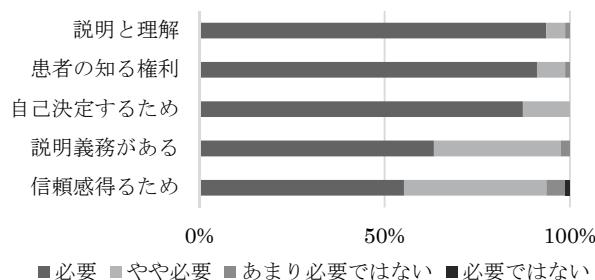


図1. ICの必要性

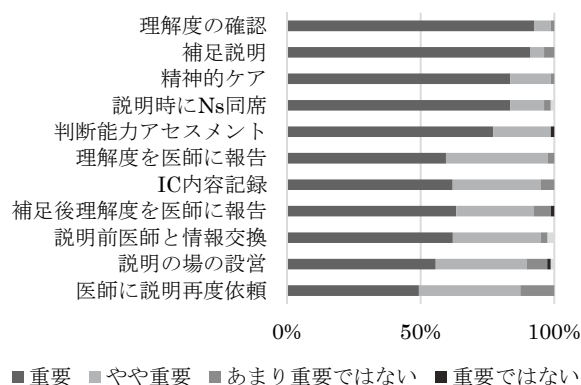


図2. ICにおける看護の重要性

【考察】ICの必要性が高いと認識されていた3つはどれも患者にとっての利益に影響する事項であった。また、ICにおける看護の重要性について、「理解度の確認」「補足説明」を重要であると認識している学生が多いことから、ICで医師から受けた説明に対して患者や家族が疑問や不安を抱えていないか、身近な存在として支援をしていく役割を看護師が担っているという認識を学生は有していたと考えられる。実習でのICの同席の有無による必要性、重要性の認識に有意差を認めなかったことから、ICの必要性や看護の重要性について実習での同席の有無ではなく、カンファレンスでの体験の共有や、講義から学びを得ていると考えられた。

### 【結論】

- 1、「ICの必要性」では「必要」「やや必要」「看護の重要性」では「重要」「やや重要」が9割以上占めていた。
- 2、実習でのIC同席の有無による認識の差は無く、「ICの必要性」で女性と私的場面でのIC同席者、「ICにおける看護の重要性」で女性に有意に認識していた。

### 【文献】

- 1) 飯塚京子, 清水喜美子, 山西文子: インフォームド・コンセントにおける看護の役割, 臨床看護, 22: 2056-2061, 1996.
- 2) 石原和子, 志水友加, 岡田純也ら: 看護学生のインフォームド・コンセントの認識と看護者の役割に関する研究—臨地実習前後における意識の変化—, 長崎医学部保健学科紀, 14: 93-99, 2001.